

外科医のためのエビデンス

安達洋祐(著)

慶大教授・一般・消化器外科

北川雄光

素朴な疑問を解きほぐすドクター A の
温かな眼差し

本書は、医学書院から刊行されている『臨床外科』誌に連載された「ドクター A のミニレクチャー」を書籍化したものである。私は、ドクター A、すなわち経験豊富な外科医であり情熱的な教育者でもある安達洋祐氏本人、およびその著作の大ファンであり、この連載も必ず書籍化されるものと待ちわびていた。

彼の著書は、いつも現場から生まれてくる基本的な課題に、肩に力を入れず淡々とアプローチするところから始まる。その視線は常に若手医師、レジデントの視線であり、スタートラインは常に「素朴な疑問」である。本書は、誰でも抱いたことがあり、そして明確に答えることができない「疑問」に関して、エビデンスに基づいてひもといていく形式が採られている。

まず、その魅力は全ての項目が「素朴な疑問」に対する、基本事項、医学的証拠、補足事項、筆者の意見、疑問の解決という共通の構成で完璧に整理されていることである。ごく自然に、既知事項、理論展開、その根拠、現時点におけるコンセンサスが理解できる。そして、その医学的根拠は1,000以上にも及ぶ膨大な文献の読み込みから生まれてくる「至極のエッセンス」に裏付けられている。まさに圧巻である。

一方、「筆者の意見」は決してメタ解析の解釈に関する科学的「意見」ではなく、著者の外科医としての随想、哲学が語られており、最も読み応えのあるパートである。「吻合不全を平気で器械や患者のせいにする外科医はメスを持つ資格がない」「外科医は直腸切断をネガティブに考えず、管理しやすい美しいストーマを作る責任がある」「臨床試験の結果を外科診療で実践する時は、患者の条件や適用する範囲が重要であり、臨床試験の結論を鵜呑みにしてはいけない」など著者の外

科医としての信念と温かい眼差しを存分に味わうことができる。

また、本書は大きく二つの読み方、楽しみ方ができる。一つはそれぞれのテーマについて熟読し、自分なりに整理し、また、根拠となった文献に直接目を通してもっと違う見方ができないか「ドクター A に挑戦する」楽しみ方である。この場合、ドクター A は想像以上に奥が深く、知識も広いためなかなか歯が立たないが、その「挑戦」のプロセスで大いに勉強になる。

もう一つは「横に読み流す」試みだ。各章は、その内容と関係があるようなないような、不思議な序章から始まる。全て他書の引用で構成されているが、著者が社会や医療界に向けて「叫びたい内容」を代弁した珠玉の「引用」であり、これも横に読み通すと極めて重厚である。さらに、各章末のコラム、「3つのポイント」は、まさに外科レジデント諸君に「横読み」をしてほしいパートだ。これは常に著者が日常の診療、教育の中で若手に語りかけているであろう教育者としての大切なメッセージである。

そして、なぜか「歴代イグ・ノーベル賞の受賞研究」が全ての章末に掲載されている。そこには細かな解説はなく、わずか一行の紹介だが思わず笑みがこぼれてしまう。あらためてイグ・ノーベル賞は、その着眼点が全てであり、それに尽きることを痛感する。常識や「いわゆるエビデンス」に流されずに「独自のものの見方をせよ」という



●B5/頁232/2015年
定価：本体 4,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02100-5]
医学書院 刊

著者の熱い思いが伝わってくる。

本書は全体を通じて、エビデンスを熟知，吟味した上で，自ら考える姿勢，哲学を貫く姿勢，すなわち外科医が体得すべき大切な姿を示してくれているのだ。

もちろん本書の根幹は，外科診療において大切

な事項のエビデンスに基づく解説であることは言うまでもないが，著者の卓越したセンスと，若者への愛情溢れるメッセージによって綴られた「素朴ながらも卓越した名著」である。外科レジデント諸君のみならず，「現場の教育者」必携の書であることは間違いない。